

ケニア訪問レポート 2012.2.26-3.6

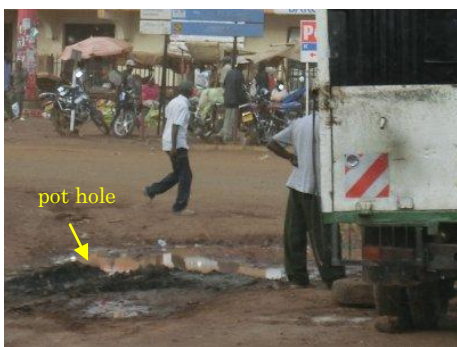
氷見英子

ジョモケニアッタ農工大学(JKUAT)の農学部園芸学科を卒業した Emily Gichuhi 氏が岡山大学の修士課程に入学して同じ研究室に入ってきたのは昨年 4 月のこと。最初の半年は日本語研修でほとんど研究室にはいなかったものの、日本語レッスンは早く終わる木曜日と金曜日は午後から研究室に来て早速実験を開始していた。Emily への実験指導を始め、日本での日常生活について教えるうちに徐々に気心がしれてきた。そうすると、実験の合間やコーヒータイムに私が Emily に日本のことや日本語を教えるだけでなく、私が Emily からケニアのことやスワヒリ語を教えてもらうようになってくる。ケニアという国に対して親近感を持つようになるのは自然なことであった。

さらに、私が昨年度から AASPP の事務補佐をしていた縁もある。ケニアに渡航される先生方の書類を作成したり、あるいはケニアから日本に短期滞在される若手研究者のお世話をするうちに、ケニアの地名に詳しくなってきたり、あるいはケニア人の知り合いが増えてくる。そうはいつでも私自身がケニアに行く機会はまずないと半ば思っていた。

しかしながら、事務補佐をしながら研究生として行っている私自身の研究 -イネ科植物の種子休眠と穂発芽- がケニアで課題になっている事情があったことで、思いがけずケニアに行かれることになった。Emily がまるで自分のことのように喜んでくれたのは言うまでもない。

Emily から事前に「これは日本と決定的に違う」と言われたのは、道路事情の悪さである。舗装して



いないところはもちろんだが、舗装してあってもところどころに大きな穴(pot hole)が開いているという。また、道路に段差(bump)が頻出するという話も聞いた。これはあまりスピードが出ないように、わざと作っているのだという。うまいドライバーは pot hole も器用に避けるし、bump の手前ではスピードを落とすのであまり気にならないが、下手なドライバーの場合は pot hole にはまったりスピードを落と

しきれずに bump の上を走行するため、車の中で乗客が「ジャンピング」することになり、とてもではないが眠れないという。実際にケニアに着いて、空港からナイロビ市内に向かう途中に bump や pot hole を見つけた時はむしろ感動してしまったほどである。

ナイロビに到着したらすでにケニア時間で夕方だったため、直接宿泊施設(AICAD)に向かったところ、昨年夏に坂本研に2カ月滞在していた Peter Kamau 氏がわざわざ出迎えに来てくれた。AICAD の宿泊施設と JKUAT は目と鼻の先なのだが、Peter が今所属している研究機関は離れたところにあるらしく、この日はわざわざ出てきてくれたのである。終わってみればたった2ヶ月であるが、2ヶ月でも一緒に実験し、議論し、同じ時間を共有することで深い親近感を育むことは可能なのである。この次の日には、私が所属している前



Mwangi 氏から頂いたバナナ

川研に滞在していた John Mwangi 氏に会うことが出来た。やっとケニアのバナナを味わわせてあげることができ、とたくさんのバナナを持ってきて下さったのには感動した。天然に熟したものを食べられることは日本ではまずない。実に美味しく全員で頂いた。またこのあとも昨年と一昨年に谷

先生の実験を行っていた Catherine Ngamau 氏は Mwea の圃場見学に同行してくれて、現地の農家の人への聞き取り調査に協力してくれた(ケニアの公用語はスワヒリ語と英語ではあるが、必ずしも全員が英語を話せるというわけでもないようである)。

坂本研に滞在していた Alice Mithamo 氏とはナイロビのホテルで開催されたイネ研究のシンポジウムで会うことが出来た。今は大学から離れ、政府機関であるケニア基準局(Kenya Bureau of Standards)に所属している



ソルガム畑での Ngamau 氏と津田教授



A. Mithamo, J. Mwangi 両氏と

とのこと。日本にいるときはいつもラフな服装でいるところしか見なかったが、この日はきちんとフォーカススーツで参加していて自信と貫録に満ちた堂々とした姿であった。いずれの方々も日本での生活が非常に有意義であったことに感謝し、またそれぞれが研究室で時間を共に過ごしたメンバーの名前を一人一人挙げて全員がどう

しているか、元気であるかを必ず尋ねていた。最近の日本から薄れつつある美德、義理堅さを見たような気がした。

義理堅さ以外のキーワードとして「保守的」がある。これは服装にも表れているのだが、どんな地方に行っても基本的に男性はシャツとズボン、女性はブラウスとスカートあるいはワンピース姿である。移動中も車窓からだいたい観察したのだが「T シャツ・ジーンズ」に象徴されるようなラフな姿はあまり見られなかった。またケニアでは小学校から制服がある。色彩は日本のような紺やグレーではなくもっとカラフルであるが、それでも女子はスカート姿であることは変わらない。



学校帰りの小学生

黄色のインナーにエンジのベスト、それに緑のスカートという日本では考えられないような色彩のものもある一方、空色のシャツにグレーのスカート、またスカートにも同じ空色のラインがついているなど、思わず目をとめてしまうかわいらしい制服も多かった。倉敷は繊維の街で学生服生産量は日本一だが、ケニア制服図鑑など作って倉敷の制服業者に見せたらおそらく「学生服」の固定概念を崩すことになるだろう。

帰国してから Emily にケニアの服装について話を聞いてみたところ、ケニアの一部の大学では T シャツやジーンズなどの軽装は禁じられているとのこと。またケニアでの「ミニスカート」はひざ丈を指すようで、深いスリットが入ったスカートなどはしていると、「そんなに裸になりたいならこうしてやる」と破かれてしまう(!)事件もあったらしい。このような事情で JKUAT や KARI での訪問時にはそれぞれ正装した研究者が出迎えてくれたため、こちらももっときちんとした服装で行けば良かったと反省したのだった(もっともその足で圃場見学もさせてもらい、積極的に圃場の中にも入れてもらったため、結局どちらに合わせる服装選びをすればいいのか正解はわかりかねるが)。

JKUAT の設立には日本政府が深くかかわっていること、またそこには岡山大学のメンバーが多くかかわっているという歴史があり、どこに行っても歓待していただいた。これは、現在 JKUAT でリーダー格になられている先生方がかつて岡山大学の先生から指導を受けたこと、つまり 10 年前 20 年前の諸先生方の努力の副産物であって、現在の私達の努力ではない。ということは、今、私達が何か努力しない限りは 10 年後 20 年後に歓待されるとは限らないのである。ケニアと日本双方の農業を向上させるために、どちらかが犠牲になるのではなくどちらも良い結果を出すために、どんなことが出来るのか、今私達が出来ることが何なのか、強く考えさせられる訪問となった。

Mwangi 氏に JKUAT の研究室内を案内してもらったが、頻繁に電気が消える。電圧が不安定なためらしい。だいぶ前に日本から送られたらしい研究機器を数多く目にしたが、残念ながら使われていない/使える状態にないものも多かった。設立当初から比べ



とても開けられそうにないディーブフリーザー

ると JKUA は急速に発展し、それとともに職員・学生数が急増しているとのことなので、JKUAT 内における発電設備が対応しきれていないようである。



JKUAT 設立に日本が深くかかわったことを示すプレート



植物のない「植物育成用インキュベーター」



すっかりホコリをかぶったアリーン冷却器と蒸留装置

JKUAT の圃場は Murage 博士にご案内いただいた。この時期は乾季の終わりで、かなり乾燥しているとのこと。Emily から”very dusty season”と聞いていたが、確かに土ぼこりがもうもうとしている。まず見せていただいたのはソルガム圃場で、ちょうど女子学生が耕しているところだった。二週間おきに植えて、成長によるさまざまな因子の調査をするらしい。写真を撮ってもいい?と聞いたらにっこり笑ってポーズをとってくれた。

この後見せていただいたのが人工ダム。こんなに乾燥しているのにどうやってイネの研究をしているのかと内心疑問だったのだが、かなりの広さ(深さも 1.5m ほどあるらしい)なので納得した。周りの圃場より一段高くなっており、高低差で圃場へと水が流れるようになっている。他の圃場はすっかり乾燥しているが、ダムの周りは土が水を含んでいるため、歩くごとに靴に土がついて重くな



「この畑は私が管理しているの」と誇らしげな女子学生



圃場用の人工ダム



圃場を耕すのはウーマンパワー

りそのあと土を取るのに難儀した。粒子の細かい粘土質なのか、乾いたらまるで絵の具で塗ったかのようにしっかり付着していて軽く拭くくらいでは全く歯が立たない。最終的には靴を外に持ち出して、水をかけながらごしごしこすってようやく綺麗になった。AICAD の部屋に「一つ、室内でタバコを吸わないでください。一つ、室内で靴にブラシをかけないでください」という二か条が貼っ

てあったのはこのことだったのかと納得した。

それにしても驚いたのは、水田圃場を(人力で)耕していたのが全て女性だったことである。帰国後に写真を見せながら Emily に聞いたが、平然と「ケニアでは女性がやるのよ」と言われたので本当に驚いた。そういえば JKUAT は学長も副学長も女性なのだが・・・。

その隣の水田は水が張ってあり、すでにイネが植えられていた。もちろん田植えも人力だそうだが、それも女性がやるのかどうかについては聞くのを忘れてしまった。



田植えが終わった後の水田。等間隔に棒を立てて、水田の向こう側とこちら側の棒に糸を張り、その糸に沿って田植えすること。糸にも等間隔に印をつけておくことで、水平・垂直両方向で等間隔に植えられるそうである。



測量実習中らしい学生たち。そんな実習でも女子学生はスカート姿である。

広い広い圃場を回り、ようやく校舎が近くなってきた頃に学生が何かしているのに気がついた。近くまで行って、ようやく測

量の実習をしていることが判明。またさら

に歩き進めると、別のところでは農機具実習をやっているところだった。いかにも農業工業大学という感じである。

圃場や研究室を見学させてもらったところで「Tea break の時間だから」と学内のスタッフ用カフェテリアに連れて行かれた。Tea break の時間はとても大事にされているらしく、イギリス領だったころの名残が未だにあるのも「保守的」な表れかもしれない。

ここ JKUAT のカフェテリアでは、牛乳で煮出した紅茶である「チャイ」がポットに入っていた。これをそれぞれカップに入れて、あとは心ゆくまで砂糖を入れて楽しむ。観察していると、ケニアの方々はみんなスプーンで山盛りに砂糖を入れている。しかも何杯も!! Mwangi さんが日本に滞在されている間、紅茶を出したらスティックシュガーを何本も何本も入れているので唾然としたことがあるが、Mwangi さんだけが特別甘党だったわけではないことがよくわかった。



ホテルの朝食会場。左から、温かい牛乳、コーヒー、お湯が入ったポットが置いてある。

この後も様々な場所で Tea break があつたが、たいていどこに行ってもポットが複数あり、温めた牛乳、コーヒー、お湯がサーブされている。ポットから温かい牛乳が出てくるというのも不思議だったが、ティーバッグを温めた牛乳に入れてもかなり濃い紅茶が抽出されるのが不思議だった。日本でよく見る「おいしい紅茶の入れ方」的なマニュアルは「牛乳では紅茶の茶葉が開かないので、まずお湯で濃く入れて、そこに牛乳を入れる」なのだが、ケニアの紅茶の茶葉は牛乳の中でも開くらしい。

別の機会に JKUAT のカフェテリア内にある特別室で副学長と会食(昼食)があつた。buffet形式のため、料理名がわからず、カフェテリアのシェフ(女性)をつかまえてこれは何だ、あれば何だと聞きながら写真を撮ったところ、ケニアの料理に興味を持ってくれたのが嬉しかったのか、とても丁寧に教えてくれた。



農機具取り扱いの実習中の学生。わきあいあいと楽しそうに機械を扱っている姿を見てこちらまで楽しくなった。



牛乳で煮出した紅茶・チャイと、甘いスナック類(三角形のサモサ、ココナッツがついたビスケット、穴のないドーナツ)

ケニアの主食である三大穀類はトウモロコシ・コムギ・イネである。トウモロコシは粉にしてウガリ(Ugali)というモチモチしたマッシュポテトのような料理に使う。イタリア料理のトウモロコシ粉から作るポレンタ(Polenta)がそれに近いが、調理法は異なり油分や塩分などで調味しない。Ugali はほとんど味が無いので日本でいう「ご飯」のように、おかずとともに食べる。小麦粉はパンにするだけでなく、加水して練った生地(dough)を発酵させずに鍋で焼くチャパティ(Chapati)も頻繁に目にした。ただインドやパキスタンの Chapati とは異なり、ケニアの Chapati はクレープのように薄い。

ケニアのお米はインディカの香り米、Basmati というものである。国内生産では需要に追いつかないため、パキスタンから輸入しており、また価格も国内産より輸入したお米の方が安いことが問題になっている。

後日参加した Kenya Rice Research Symposium での発表によると、2009年におけるケニア人一人当たりの主食は(消費量として)トウモロコシが 60%超、コムギが 20%、イモ類が 9%で、イネは 8%とイモ類よりも少ない(ソルガムおよびヒエなどの雑穀が残りの数%を占める)。このようなデータをみるとケニアではあまりイネは食べられていないように見えるが、1961年のデータではイネの消費量は全体の 1%にしか過ぎない。50年で消費量が 8倍になっていると考えれば大きな変化であろう。

ちなみにケニアでは朝食や軽食としてサツマイモやアロールート(arrowroot)をゆでたものがそのまま供される。西インド諸島や東南アジアで栽培される同名の arrowroot はクズウコン科で、採取したデンプンを菓子や麺の原料として使用するが、ケニアでいう arrowroot はサトイモ科のタロイモの一種である。

ケニア全体でのこれらの作物の生産量のグラフもあったのだが、国全体での生産量に占めるそれぞれの重量割合が示されていたため、消費量と生産量とのバランスを見比べることが出来ないのが残念であった。

食後に Mwangi 氏から「あの女性が Emily のママ」と教えてもらったのが、丁寧にメニューを教えてくれた



JKUAT での会食。Basmati ライス、ジャガイモ、豆のトマト煮込みが並ぶ。



左から野菜のシチュー(ご飯にかける)、サラダと揚げ魚(Tilapia)、ローストチキン



スクマウィキ(Sukuma wiki)というケニアではポピュラーな野菜のソテー。ケールとも言われるが苦味はほとんどなく、ホウレンソウのようなえぐ味もない。



KARI での Tea break に供されたサツマイモとアロールート。調味されていないがこのままでも美味しい。

シェフだった。何という偶然!!

ケニア滞在中の前半に訪問した Mwea の National Irrigation Board(NIB: 国立灌漑委員会)はイネの一大生産地の中にある。何人かのケニア人に話を聞いたところ、「輸入米の方が安いけど、ケニア産の方が、それも Mwea 産の方が絶対に香りがいい」とのこと。これを悪用して、Mwea 米と偽って(他産地の米と交ぜて)売る悪徳業者もいるらしい。日本でいうところの「魚沼ブランド」みたいなものだろうか。



メニューの中身を延々と聞いたカフェテリアのシェフ。この方が実は・・・。



NIB の管理圃場にある NERICA。穂によって成熟度合いや色が異なる。

所内の圃場を見せていただき、数多くの品種が育成されている現場を目の当たりにした。イネもムギも日本と違って年に二度収穫できるので「日本の倍、研究が進む」と冗談交じりに言われたりしたが、確かに一つのアドバンテージではある。とはいえ一区画の中に明らかに系統の混じった部分など、管理が行き届いていない部分も多く見られたのは残念であった。

ケニア滞在の後半には、Nairobi から北西に約 250km 離れた Nakuru へと移動した。Nakuru はフラミンゴで知られるナクル湖国立公園を擁する美しい街である。ここからほど近い Njoro に Kenya Agricultural Research Institute (KARI: ケニア国立農業研究所)の施設がある。KARI はケニア国内に 20 以上のセンターが分散しており、各地域の気候や土壌に合わせ、畜産や作物栽培について研究を行っている。



セミナー後に圃場を案内して下さった Njau 博士。

この研究所で育種部長をされている Peter Njau 博士は昨年植物研に一月滞在され、その間に日本の農林水産省の農業研究所を数か所視察されている。このようなご縁もあり、私達の訪問に合わせてセミナーを開催していただいた。KARI にとどまらず、近隣の大学にも声をかけ、KARI と共同研究を行っている大学生・大学院生も多く参加してくれた。Njau 博士の心遣いに感謝したい。また日本側研究者の研究発表だけでなく、ケニア側研究者の研究発表も併せて行うことで、結果的に双方の農業事情や研究状況が把握できる交流となった。最初に KARI-Njoro の所長からこの研究所の沿革をご説明いただいた。

20 世紀初めにイギリスから入植した Delamere 卿がコムギをケニアの地に植えたのがケニアにおけるコムギ栽培の始まりである。当初は Nairobi 近郊でコムギ栽培を行っていたが、数年後に黄さび病(Yellow rust)が大発生した。そのため Njoro へと栽培地を変更せざるを得なくなったことが、この地における現在のコムギ栽培とコムギ研究へとつながっている。しかしながら皮肉なことに Yellow rust も Njoro へと移動したようで、未だに Yellow rust

被害が多発している。

上述したように、ケニアにおいてコムギはトウモロコシに次ぐ第二の主要穀類であるが、消費量は生産量を上回り、現在は 50%を輸入に頼っている。このことから、KARI-Njoro では、高収量、病気・病虫抵抗性、乾燥・酸性土壌抵抗性、製パン性に優れた高品質、のコムギ育成を目標に研究を行っているとのこと。

Yellow rust の被害が大きいことから、抵抗性品種の育成が第一に挙げられていたが、それとは別に酸性度合いが強い地域では生育できるコムギ品種に限られるという要因もある。また穂発芽や倒伏などの問題も起こり、いずれにしても解決しなければならないことは山積している。



坂本教授によるプロジェクトの説明

セミナーでは所長からの発表の後、坂本教授によるアジアアフリカ学術基盤形成事業 (AASPP)の本プロジェクトの紹介が行われた。昨年 Njau 博士が日本に短期滞在されたのに続き、次年度も KARI-Njoro から若手研究者を日本に短期招へいする予定であるという話をしたところ、会場にいた多くの若手研究者が一斉にどよめいた。この後の Tea Break や圃場見学中には数人の若手研究者

から積極的に話しかけられ、それぞれの方々からの熱烈な自己アピールを聞く羽目になった。短期的であっても日本で研究が行えるのは若手研究者にとっては大きな魅力であることは間違いなく、わずかな滞在期間に最大限の成果を出したいという熱意が非常に伝わってきた。日本側もその熱意に応えられるように受け入れないといけないと今まで以上に気を引き締める思いでそれぞれの研究者と会話を行った。

ケニア側の研究発表は、研究発表というよりは「こんな研究を行うつもりである」という提案のようなものが多かったが、その分、今ケニアでどんな研究が望まれているのかが透けて見える結果となった。逆に日本側の研究発表は本来の「研究発表」であったこと、また普段育種に携わる研究者にとっては、特に平山教授の最先端の植物ホルモンネットワークの話などが非常に刺激的であったらしく、一言も聞き逃すまいと真剣に聞き入っている様子が印象的だった。



平山教授による研究発表

セミナーの後に研究室の見学をさせていただきながら大学院生や若手研究者と直接話したが、MAS (marker assisted selection: DNA マーカー利用選抜)の話ばかり出る。もちろん日本でも多くの研究者が MAS 実験を行っているのだが、ここでは口を開けば MAS、MAS なので「これに乗り遅れたら研究者失格」のような一種のトレンドなのかと感じた。極めつけ



熱心に平山教授の発表を聞く聴衆

は私がセミナーで発表した「種子の色」を知るにはどんな DNA マーカーを使っているのかと聞かれたことである。「肉眼で見えるのだから、DNA マーカーを使わなくても区別できるでしょう?」と説明したところ、一瞬キツネにつままれた顔をされてしまった(次の瞬間には深く納得してもらったが)。MAS の原理など二の次で、とにかく「MAS をやればうまくいく」と先走り気味になっている印象を受けた。

コムギの品質測定の実験スペースも見学させてもらった。子実内のタンパク含量を測定する近赤外分光装置や水分含量測定装置、また子実内のデンプンのアミロースの分解度合いを示すフォーリングナンバー測定装置、小麦粉に加水して練った時の生地物性を評価するファリノグラフなどが揃っている。またその横にはこの研究所で栽培したコムギとそれぞれのファリノグラフ、また最終加工品であるパンも展示されていた。常時パンが展示されているとは考えられないので、この日の展示用にデータを取り、パンを焼いてくれたと考えられる。KARI の方々のご好意に再度感謝したい。



ケニア産小麦のファリノグラフとパン



手前の緑色はオオムギ、奥の黄金色は収穫が近づいたコムギ。

このあと車で小一時間先の圃場を見学させていただいた。しかし「車で小一時間」の感覚は日本のそれとは大きく異なり、舗装されていない道幅の狭い道である。ドライバーは慣れているのかそのような道であってもほとんど遅い車を抜いていくのでこちらは気が気でない。これではしょっちゅう圃場を見に来る気にはならないだろう・・・と思ったのだが、Njau 博士に伺ったところ「ほぼ毎日来てますよ」と言われていた。

ケニアでのコムギ栽培は、2 割の大規模農家が 8 割の生産を行っている(つまり 8 割の小規模農家は全部合わせても全体の 2 割しか生産量がない)。KARI-Njoro の圃場近辺は「2 割の大規模農家」が多いらしく、視界の先の先までコムギあるいはオオムギ畑であった。普段「すぐそこが隣家」という倉敷の圃場の中では全く意欲がわかないが、こういう畑であれば「小麦畑でつかまえて」あるいは「大麦畑でつかまえて」という名作が書けるかもしれない。

前述したように例年 Yellow rust の被害に悩まされるケニアコムギ栽培であるが、今年は珍しく被害が少ないとのこと。「被害にあっていない畑を見ても実感がわかない

かもしれないけれど・・・」と Njau 博士が言われていたが、確かにこれだけの面積の畑が



収穫直前のコムギ種子(手は Njau 博士)。日本の感覚であれば開花後 30 日目頃、水分含量は(目測で)25%程度、まだ水っぽいように見える。日本であれば収穫して乾燥器に入れてしまうがケニアでは天然に乾燥させて収穫するのでこの後の雨は致命的な穂発芽被害になるだろう。

大々的に被害を受けたら、目も当てられないだろうと想像できた。

ケニアは赤道直下であることから、多くの日本人は「ケニア→赤道直下→ジャングル」と連想するが、実際は国土の大部分が標高 1100m - 1800m の高原で、年間平均気温が 19℃の乾燥した高原サバンナ地帯である。ナイロビは標高 1600~1700m なので鳥取県の大山の頂上とほぼ同じであり、普段倉敷で生活している私達にとってはかなりの登山をしたことになる(倉敷駅前の標高は 4m)。日本から持っていった飴の袋もパンパンになったし、圃場を見て回るなどの軽い運動でさえ、かなりの運動量に感じたほどである。また、乾季の終わりということもあってあちこちが乾燥していたため、半日着けていたマスクが肉眼で見てもはっきり茶色に変わったのも驚いた。



ナイロビで飴を取りだすと・・・



KARI の圃場で。ひび割れがはっきり見えるほど乾燥している。



左:半日使用後のマスク
右:使用前のマスク

今回のケニア訪問期間に JKUAT(ジョモケニアッタ農工大学)、NIB(国立灌漑委員会)、KARI(ケニア国立農業研究所)そして JICA (独立行政法人国際協力機構)ケニア事務所への訪問を行い、それぞれの機関で本事業 - アジアアフリカ学術基盤形成事業「東アフリカにおける作物ストレス科学研究ネットワーク拠点形成と次世代作物の開発利用」 - の説明をさせていただく機会を得た。



JKUAT 学長表敬訪問



JICA ケニア事務所表敬訪問

JKUAT では、岡山大学との数十年にわたる交流を足がかりにさらに今後交流を強化させること、さらに日本・ケニア双方の将来につながる農業研究への展開について活発な意見交換をすることができた。また NIB では実際の圃場現場を見学させていただきながらケニアにおけるイネ研究の現在の問題点と将来への取り組みについて意見が交わされた。KARI-Njoro ではコムギおよびオオム

ぎの育種的な品質改善について実質的な情報交換が行われた。帰国直前には JICA ケニア事務所を訪問し、このような成果を報告するとともに、JICA ケニア事務所の加藤所長からは農業分野に限らず日本がケニアにどんな貢献が出来るのか求められているのか、将来的なビジョンを見据えてまず現在どのような取り組みがなされているのか、なども熱心にご説明いただいた。またアフリカ連合(African Union)が構想中の高等教育システム・



Kenya Rice Researchers Symposium
で本事業の説明をする坂本教授

Pan-African University (PAU)に関しても一からご説明いただいた。PAU はアフリカ全土にわたる構想であるが、ケニアがリーダー格となってこれを引っ張り、また JKUAT がケニアでの PAU 拠点となることが決定している。本事業のような岡山大学-JKUAT のつながりがさらに今後も続くことで、これからは大学を超え国を超え、アフリカ全土へのつながりへと広がっていくのではないかという途方もなく大きな未来図を描いて頂いた。多忙な中時間を割いていただき、また熱心に議論に加わって頂いた加藤所長始め JICA のスタッフの方々に重ねてお礼を申し上げたい。

最後にこのような貴重な体験をさせていただいた、アジアアフリカ学術基盤形成事業「東アフリカにおける作物ストレス科学研究ネットワーク拠点形成と次世代作物の開発利用」によるサポートに深く感謝をささげたい。



紫の花が美しいジャカラダ。どこに行っても優雅に咲いていたが、雨季になると一斉に花を落としてしまうとのこと。



ブーゲンビリアは垣根などに使われており、あちこちで満開だった。赤やピンクのブーゲンビリアは東南アジアでもよく見るが、白やオレンジは珍しい。紫や青はないところをみると、フラボノイド色素合成経路の水酸化酵素の一つが欠落していると思われる。